

地域で暮らし続ける～日本とデンマークの現場から

コロナ禍 変異種が確認されたミンク

銭本隆行・日本医療大学認知症研究所研究員

2020年12月2日



デンマークでも公共の場ではマスク着用が義務付けられるようになった＝オーデンセ市のショッピングセンター「ローセンゴーセンター」で2020年11月24日、加藤幸夫氏撮影

新型コロナウイルスの“第3波”ともいわれる感染拡大が日本全国で起きています。札幌市に暮らす筆者も、周辺でクラスターが起きたり、勤務校の学生が感染したりするなど、新型コロナの存在が身近に感じられるようになってきてしまいました。しかし、春ごろと比べれば、感染者への対応にパターンが生まれており、いい意味で慣れてきている感じもあります。たとえば、勤務校では少しずつ、遠隔授業から対面授業に戻しつつありましたが、学生の感染を受けて、実習のような特別なもの以外は再び遠隔授業に戻りました。

デンマークで多いPCR検査

デンマークにおいても、新型コロナは再び活動を活発化しています。国立血清研究所のサイトによれば、11月22日の時点で、1日にPCR検査を受けた数が5万8018人。そのうち、感染が判明した者が850人となっています。人口が約580万人ですから、人口約1億2000万人に対して1229人（11月24日）という日本の現状に比べれば圧倒的に感染率が高いといえます。

日本人ほどマスク慣れしていなかったデンマーク人（そのほかの外国人も慣れてはいなかったでしょうが……）は、最近までマスクには消極的でした。

「誰も外から汚れて入ってこようが、せきをしようがおかまいなし。マスクも手洗いもほとんどしていませんでした」



店内には「お客様は最大60人まで」と書かれた張り紙が＝オーデンセ市の「ローセンゴーセンター」で2020年11月24日、加藤幸夫氏撮影

日本人の知人は、コロナ禍の中でも変わらないデンマーク人の子供の行動様式に驚いていました。しかし、筆者は10年間のデンマーク滞在経験からすれば、デンマーク人のこれまでの衛生への概念はそんなものかなとは思います。

「マスクをしていることは、自分が危ないと言っているようなものだろ」。知人のデンマーク人はこう豪語していました。

「マスクの効果は限定的」

そんなデンマーク人を多少なりとも“勇気づける”研究の発表もありました。ロイター通信の報道によれば、コペンハーゲン大学病院はこのほど、「マスク着用による新型コロナ感染予防効果は限定的」とする研究結果を発表しました。成人6024人を対象にマスク着用と非着用のグループに分けて調査を実施した結果、1カ月後に着用グループで新型コロナに感染した人の割合は1.8%、着用していないグループではこの割合が2.1%でした。

とはいえ、「マスクの効果がない」という結果ではないため、その可能性を知ったうえでの使用が求められるということだと思います。「口をマスクでふさげば予防」と思いがちな日本の風潮には反することでしょうが。



ショッピングセンター内には消毒液が設置され手指の消毒を促している＝オーデENSE市の「ローセンゴーセンター」で2020年11月24日、加藤幸夫氏撮影

10人以上のイベント禁止

しかし、デンマークも今ではかなり変わりました。10月からは、10人以上のイベントが禁じられました。また、デパートやスーパー、売店でもマスクの着用が要請されました。教育機関においても、一定程度ですがマスク着用が求められています。

さらに、酒飲みが多いデンマーク人にとって厳しいのは、22時以降のスーパーや売店でのアルコール販売の規制です。そのうえで、他者との接触人数を制限することが推奨されています。これは集まって話すことが何よりも好きなデンマーク人の行動様式に、大きな変容を及ぼす可能性がある規制・制限です。新型コロナは、人類始まって以来の変化をもたらすきっかけをはらむ脅威なのですね。

そんな中、日本でも報道されたと思いますが、デンマーク人が断腸の思いで決断をせざるをえない出来事が発生しました。毛皮を利用するために飼われているミンクの新型コロナ感染への対応です。

デンマークは実は、ミンクの一大生産地です。ミンク農場は特にデンマーク北西部の北ユトランド地域で多く、全国で1700万匹のミンクが飼育されています。ミンクの毛皮は中国などで需要が増えています。しかし、「毛皮のための大量飼育」という行為に、動物愛護の観点から批判の声が根強くありました。



金網の箱ワナにかかった野生化したミンク＝長野県内で2005年

ミンクから変異種が見つかる

デンマークで11月初め、ミンクに新型コロナウイルスの変異種が見つかったことが公表されました。さらに、ミンクの農場関係者ら12人からも変異種による感染が確認されました。動物から人、人から動物への感染は起こりえるものです。ただ、変異種が広がれば、現在世界で開発が進められているワクチンが効かない種類のウイルスが広まることになります。ワクチンの有効性に関わる大変な事態に発展するおそれがありました。

AFP時事の報道によれば、フレデリクセン首相は「（変異は新型コロナの）ワクチンが効かなくなるリスクをもたらす」と指摘し、1080以上の農場の1700万匹ものミンクを殺処分することになりました。同様の殺処分は、オランダやスペインで行われたということです。

感染拡大を防ぐため、北ユトランド地域では、旅行の禁止や鉄道・バスなどの公共交通機関の運行停止、飲食店の閉鎖などの大規模な規制が敷かれました。すでに3分の2ほどのミンクが殺処分となり、「脅威は減った」として規制は2週間ほどで緩められました。デンマークの知人は「ミンクに責任はないのに、みな殺処分されるなんてかわいそう」と悲しんでいました。

しかし後日談もあり、「政府の殺処分の命令には法的根拠がなかった」として野党が追及し、政府は謝罪に追い込まれ、農相が辞任する事態に陥りました。筆者はどちらかに肩入れするほどの情報ありません。ただ、いざというときの危機対応はあらためて難しいものだと感じました。

<[医療プレミア・トップページはこちら](#)>

銭本隆行

日本医療大学認知症研究所研究員

ぜにもと・たかゆき 1968年広島市生まれ、福岡市育ち。51歳。早稲田大学政治経済学部在学中にヨーロッパを放浪。そのときにデンマークと出会う。大学卒業

後、時事通信社、産経新聞社で、11年間の記者生活を送る。2006年にデンマークへ渡り、デンマーク独自の学校制度「国民高等学校」であるノアフュンス・ホイスコレの短期研修部門「日欧文化交流学院」の学院長を務めた。全寮制の同校で知的障害者のデンマーク人らと共に暮らし、日本からの福祉、教育、医療分野に関する研修を受け入れながら、デンマークと日本との交流を行ってきた。2010年にオーデンセペダゴー大学で教鞭を執り、2013年にはデンマークの認知症コーディネーター教育を受けた。2015年末に日本に帰国し、2016年3月に名古屋市の日本福祉大通信制大学院で認知症ケアシステムに関する修士号を取得し、同年、福岡市の精神障害者の生活訓練事業所の設立・運営に携わる。現在は札幌市の日本医療大学認知症研究所と名古屋市の日本福祉大学大学院博士後期課程に在籍しながら地域包括ケアシステムに関する研究を進めている。ノーマライゼーション理念の提唱者であるデンマーク人の故N.E.バンクミケルセンにちなむN.E.バンクミケルセン記念財団理事も務める。

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。

画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.